



人に頼ることの
必要性と実感

育休を通して親としての自覚と 責任感が芽生え仕事にも プラスになる考えが身についた

徳尾 恭佑さん

社会福祉法人 青谷学園
生活支援員
【家族構成】 妻(専業主婦)、
子ども(1歳1か月男児)



緒方 隼人さん

社会福祉法人 青谷学園
生活支援員リーダー
【家族構成】 妻(専業主婦)、
子ども(1歳0か月男児)



身についたのは
対応力

■ 熟考した育休の取得時期

緒方: 妻が安定期に入ってから、施設長に報告と育休取得の相談をしました。出産に立ち会いたかったため、出産予定日付近から1ヶ月間を希望していましたが、取得時期についての迷いは少しありました。出産は時期が読めない上、自分の夜勤中に妻の陣痛が始まってしまったら立ち会うことができません。最終的に、出産前最後の健診で妻の状態や出産予定日等を踏まえて調整していただけたおかげで、無事育休中に立ち会うことができました。育休を取るにあたって最も不安だったことは、収入面です。これまで1ヶ月間も職場を離れたことがなかったので、無事に生活していけるのか不安に思いました。しかし上司との面談で収入について詳しく話を聞くことができ、その不安は払拭されました。育休中の業務の引き継ぎに関しては、法人本部から渡された書類にどのような仕事を誰に引き継ぐのかを記載した上で、引き継ぎ相手に説明したり、データ化するなどして、不在の間をお願いしたいことをおさらいするような形で話しました。

徳尾: 育休取得を考えたきっかけは職員会議です。施設長から話を聞き、そこで初めて男性の育休の必要性について認識しました。その後、妻と何度も取得時期について話し合い、結果的に1ヶ月間取得させていただくことになりました。我が家は里帰り出産を予定しており、妻の家族の長期休暇が終わるタイミングで休みに入りました。休み前は「どのように子育てをするのか」を考え、事前に調べていることだけで実践に活かせるのか日々不安を感じていましたが、妻からも教えてもらいつつ、二人三脚で乗り越えました。お風呂やおむつ交換などは、福祉の仕事で日頃から行っていることも活かすことができ、日を過ごすことに自信がつくようになりました。業務に関しては、上司に「まかしておけ」という熱いコメントと激励をもらったので、心置きなく取ることができました。

■ 育休中についての考え方は復帰後の力に

緒方: 育休を通して感じたことは、親になるという責任と自分の親への感謝です。実際に赤ちゃんが生まれるまでは、親になるということに対して漠然としたイメージしか持つこと

ができませんでした。しかし共に生活をして日々世話をすることで、親としての自覚や「しっかり守らなければ」という思いが強くなりました。育休中は、こどもの夜泣きにはじまり、いろいろな出来事が起こる中で、「限られた時間で先々を考えて対応する」という力がつきました。その力や考え方は、復帰後に仕事をする上でも役立っています。

徳尾: 育休中は、自分が親になり、1人のこどもを育てているという実感がとても感じられました。また、できることが増え、成長していくこどもの姿を見る度に喜びを感じる日々でした。第一子の育児ということで、夫婦共に不慣れで家事も育児も100点満点にするのは難しいので、育休中はあらゆることを互いに分担し合い、80点くらいでできるようにバランスを取っていました。それまで仕事において人に頼るといことが苦手でしたが、育休を通して人に頼り頼られることが必要だと思えるようになりました。

■ より長期の取得で充実した育休に

緒方: 今回私は1ヶ月間の育休を取得しましたが、これから取得する方には、叶うならばより長い期間取っていただきたいと思っています。日に日に成長していくこどもの姿をそばで感じられる幸せは、かけがえのないものです。また、産後の女性は自身が思っている以上に身体へのダメージが大きいため、少しでもゆっくり休養してもらうためにも、可能な限り長期の育休取得をお勧めします。

徳尾: 私は1ヶ月の育休を終えてみて、もっと長期で取得する方が良いと感じました。仕事を離れる期間は当然長くなりますが、生後間もない赤ちゃんの時期は早く過ぎてしまいます。長期であればあるほどこどもの成長を見届けることができますし、妻のフォローもよりできます。産後の女性の体は、交通事故を起こした時と同じくらいの負担がかかっていると言われていて、できる限り労り、子育ての大変さを共有することで、奥さんとの関係性もより強くなるのではないのでしょうか。育児に家事にと日々忙しくなりますが、妻やこどものためと考えると、私はどんな状況であっても頑張ることができました。